



Blue
Planet
Prize
2025

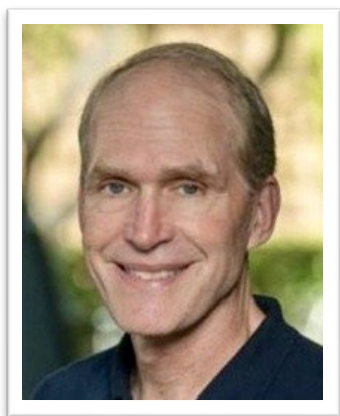
2025年(第34回)ブループラネット賞
受賞者 取材抄録

ロバート・B・ジャクソン教授

公益財団法人 旭硝子財団
THE ASAHI GLASS FOUNDATION

ロバート・B・ジャクソン教授 (米国)

Professor Robert B. Jackson



生態学者・地球システム科学者

1961年9月26日 英国（ロンドン）生まれ

スタンフォード大学

地球システム科学部教授

<幼少期～大学進学>

ロバート・ジャクソン教授は、1961年9月、英国ロンドンで生まれました。父親は石油化学業界で水処理分野を専門とするエンジニアで、その仕事の関係で一家は英国に滞在していましたが、ジャクソン教授が7歳のときに米国へ移住します。三人兄弟の真ん中として育ったジャクソン教授は、子ども時代の大半をテキサス州ヒューストンで過ごしました。スポーツが大好きで、特に野球に熱中する少年だったそうです。また、カナダやコロラドへの家族旅行では、キャンプやハイキング、釣りなど、アウトドア活動を楽しみました。父親の仕事の都合で引っ越しが多く、そのたびに友人と別れなければならなかったことは辛い経験でもありましたが、それでも愛情深い家族に支えられ、素晴らしい子ども時代を過ごすことができた、ジャクソン教授は当時を振り返っています。



写真 1 野球をする少年時代のジャクソンさん

大都市の中心部ではなく、ヒューストン、次いでシカゴの郊外で育ったジャクソンは、典型的なアメリカの中流家庭で成長しました。地元の公立高校に通い、一時期は非常に優秀な成績を収めたこともありましたが、本人が「典型的な放蕩（ほうとう）気味の高校生活」と振り返るように、基本的にはごく普通の高校時代を過ごします。科学と数学が得意だったことから化学工学の道に興味を抱き、同分野で定評のある地元ヒューストンのライス大学化学工学部へと進学しました。ライス大学を選んだの

は、比較的小規模な大学であったことに加え、近くにすでに友人が大勢いたことも理由だったといえます。ジャクソン教授は、当時の自分を決して傑出した学生ではなかったと認めていますが、良き友人に恵まれ、学生時代を心から謳歌したと振り返っています。

＜コーポレートワーカーからアカデミズムの世界へ＞

1983 年、ジャクソン教授はライス大学を卒業後、世界有数の化学メーカーであるザ・ダウ・ケミカル・カンパニーに入社し、化学エンジニアとして働き始めました。最初の勤務地はロサンゼルスでした。ダウでの仕事はとても充実しており、本人も心から楽しんでいました。しかしその頃、ジャクソン教授の中に、将来は大学教授として環境に関する研究に携わりたいという新たな志が芽生え始めます。その思いを探るため、カリフォルニア州立大学フラトン校の夜間講座に通い、植物学を学ぶようになりました。平日はダウでフルタイムの仕事をこなし、夜は大学の講義を受け、週末にはカリフォルニア郊外の山々や砂漠、海岸などに足を運び、野外調査に参加するという多忙な日々を送ります。この時期、特に大きな影響を与えたのが、ジャック・バーク（Jack Burk）教授との出会いでした。野外での実践を重視した熱意ある植物学の指導を通じて、パーク教授は、改めて大学で環境について本格的に学びたいという思いをジャクソン教授に抱かせました。この出会いが、研究者としての道を歩み始める最初の重要な一歩となったのです。そしてその決断の背後には、父親からの的確な助言もあったと、ジャクソン教授は振り返っています。



写真 2 カナダのバウンダリー・ウォーターズで釣りをする
ジャクソンさん

ある日ジャクソン教授は、仕事を辞めて大学に戻りたいと考えているものの、学位を取り終える頃には 30 歳を超えてしまうことが不安だと父親に打ち明けたそうです。すると父は、「いずれにせよ、あなたはいつか 30 歳になる。どうせなら、自分の好きなことをしていたほうが良い」と答えました。予想もしなかったその温かい言葉に励まされ、ジャクソン教授はダウ・ケミカル社での 4 年間の勤務に区切りをつけ、アカデミアの世界へ踏み出す決意を固めたのです。

＜大学での研究＞

会社を辞めたジャクソン教授は、ユタ州立大学の大学院に進学し、マーティン・コールドウェル博士の指導のもとで生態学を学びました。生態学は環境科学の基盤となる

学問であり、将来、環境分野の研究者として歩むためには、生態学の博士号を取得することが不可欠だと考えたからです。

ユタ州立大学を選んだ理由は大きく二つありました。一つは、多様で豊かな自然環境に恵まれ、生態学研究に理想的であることに加え、バックパッキングや釣り、スキーといった野外活動にも適していたことです。もう一つは、当時鳥類学の研究者であった後の妻サリーさんが、イエローストーン国立公園でフェローシップを受けて研究をしており、同じ地域で生活できるという点でした。ユタ州立大学では、植物が地下に広がる根の部分を通じて、どのように土壌から養分や水分を吸収しているのかに着目し、植物の根系に関する生態学的研究に取り組みました。この研究は、ジャクソン教授が根系生物学および根系生態学の第一人者として評価される礎となり、その後の研究者としてのキャリアに決定的な影響を与えることになります。実際、これまでに発表してきた数多くの論文の中でも、最も多く引用されているのは、植物の根系に関する生態学的研究をまとめた論文であり、この分野におけるジャクソン教授の専門性と影響力の大きさをよく物語っています。

ユタ州立大学で生態学および統計学の修士号を取得した後、1992年に生態学の博士号を取得したジャクソン教授は、同年、米国エネルギー省（DOE）の博士研究員フェローシップを得て、スタンフォード大学で2年間、地球環境変動に関する研究に取り組むこととなります。研究の舞台となったのは、スタンフォード大学が所有する生物保護区で、そこで行われたのは、大気中の二酸化炭素濃度の上昇が草原生態系にどのような影響を及ぼすのかを調べる実験でした。この研究は、化石燃料由来の二酸化炭素などの温室効果ガスが今後も大気中に放出され続けた場合、将来の環境がどのように変化するかをシミュレーションすることを目的としていました。このプロジェクトを主導していたのが、スタンフォード大学のハロルド・A・ムーニー教授です。ムーニー教授は、後に2002年のブループラネット賞を受賞することになる、世界的に著名な生物学者です。この実験への参加は、後にジャクソン教授が気候変動や温室効果ガスを研究の中心テーマとしていくうえで、決定的な転機となりました。ムーニー教授との出会いもまた、ジャクソン教授の研究者としての歩みに大きな影響を与えた、極めて重要な出来事の一つであったと言えるでしょう。

二年間のフェローシップを終えた後、ジャクソン教授はテキサス大学オースティン校の植物学部で助教授として研究・教育に携わりました。その後1999年、ノースカロライナ州にあるデューク大学ニコラス校（環境学部）に移り、現在の専門分野である炭素循環研究、とりわけメタン研究の基盤となる実験、野外調査、研究に本格的に取り組むようになります。デューク大学では、複数の研究プロジェクトを通じて研究の幅

を大きく広げていきました。その一つが、大気中の二酸化炭素濃度の上昇が森林の成長に与える影響を調べた共同研究です。大学が所有する手つかずのマツ林を対象にしたこの研究では、二酸化炭素濃度が高まれば森林はより速く成長するという当時の予測に反し、樹木の成長が思ったほど促進されないことが明らかになりました。これは、樹木が土壌中から十分な窒素やリンを吸収できないことに起因するもので、地下での相互作用が森林成長を制約するという、当時としては意外な発見でした（詳細は後述）。

また別の研究では、石油・ガス田における作業と水質汚染、温室効果ガス排出の関係を調査し、環境中のメタン量を初めて本格的に測定しました。その結果、石油やガスの採掘現場から漏れ出したメタンが、時に飲料水へと移動し、人々の健康に影響を及ぼす可能性があることを明らかにしました。こうした調査を重ねる中で、メタン排出の削減が、気候変動を抑制するために極めて効果的な手段の一つであることを、ジャクソン教授は強く認識するようになります。研究を進めるにつれて、ジャクソン教授は自然生態系にとどまらず、石油・ガス田、都市、住宅、建築物といった人工的に

「構築された環境」にも研究対象を広げ、エネルギー分野を環境科学の重要な構成要素として捉えるようになりました。現在も教授は、アマゾンの森林や湿地帯といった自然環境における長期研究と、石油・ガスのパイプラインなど人間が作り上げたシステムに関する継続的な研究の両方を行っています。その研究は一貫して、自然環境と人間社会をつなぐ架け橋となってきました。



写真 3 アマゾンの調査地へ向かうジャクソンさん

2003 年、ジャクソン教授は准教授から正教授へ昇進しました。振り返ってみると、デューク大学での研究生生活は多忙だったものの、私生活も充実していたといいます。研究に適した環境であるだけでなく、自然に囲まれた比較的田舎の暮らしの中で、家族は自作の鳥小屋でキジやウズラを飼い、乳用のヤギを飼ってチーズを作るなど、当時まだ幼かった息子たちを育てるうえでも素晴らしい環境を整えることができたそうです。そしてデューク大学で約 15 年を過ごした後、2014 年にスタンフォード大学へ移り、現在は地球システム科学部（Earth System Science）の教授として研究活動を行っています。

<炭素循環について>

ジャクソン教授が長年取り組んできた気候変動研究、とりわけ温室効果ガスの排出に関する数多くの研究の中で、社会に大きな影響を与えた成果の一つが「炭素循環」に関する研究です。この研究は、博士研究員（ポスドク）時代に本格的に始められたもので、草原や森林を対象に、土壌および土壌の健全性について詳細な調査を行う中で発展してきました。これらの研究を通じて、ジャクソン教授とその研究チームは、土壌と植生が果たす役割を含む炭素循環の重要な仕組みを明らかにしていきました。そのメカニズムは、以下のように説明されます。

植物にとって二酸化炭素は、いわば「食べ物」のようなものです。植物は葉にある微小な孔から二酸化炭素を吸収し、光合成によって糖を合成し、それを使って成長します。成長した植物は、栄養、繊維、燃料など、人間の生活に欠かせないさまざまな資源を私たちにもたらしてくれます。それだけでなく、世界中の植物が吸収する何十億トンもの二酸化炭素は、植物体内に蓄えられるだけでなく、根を通じて土壌中にも貯蔵されます。長年、地球規模で最大の自然の炭素循環は、「大気中の二酸化炭素が増えれば、植物はより多くの二酸化炭素を吸収し、その結果、土壌中の炭素貯蔵量も増える」という、比較的単純な仕組みで説明されてきました。しかし、ジャクソン教授とポスドク研究者のセサル・テレールらの研究によって、意外なトレードオフが明らかになりました。すなわち、二酸化炭素濃度の上昇によって植物の成長が促進される一方で、土壌中に貯蔵される炭素量が減少する場合がありますということです。なぜ、そのようなことが起こるのでしょうか。



写真 4 アマゾンの樹木を調査するジャクソンさん

大気中の二酸化炭素濃度が高まると、植物の成長は一般に速まります。しかし、その追加的な成長を支えるためには、植物は土壌からより多くの栄養素、ミネラル、水分を吸収しなければなりません。すると、土壌中に生息する微生物も活発化し、植物に栄養を供給するため、土壌中の有機物の分解が加速します。その結果、微生物は窒素やリン、その他の元素をより多く取り込み、それと同時に、土壌中の有機物——すなわち炭素——を大量に分解してしまいます。こうして、本来は植物によって土壌に貯蔵されるはずだった炭素が失われ、大気中へと放出されてしまうのです。さらに、土壌中の炭素が減少すると、保水力や養分保持能力が低下し、土壌の肥沃度が損なわれます。その結果、時間の経過とともに、植物の成長速度そのものも鈍化していきます。

植物の成長と土壌の質との関係自体は、これまでも研究されてきたテーマではありますが、ジャクソン教授らの研究の大きな意義は、このメカニズムを世界各地から集めたデータを用いて、大規模に検証・統合し、体系的に示した点にあります。その成果は、炭素循環に関する科学的理解を大きく前進させたものとして、高く評価されています。

＜メタンに関する研究＞

ジャクソン教授が数多くの研究の中で特に心血を注いできたのが、メタン排出量の測定と削減に向けた取り組みです。メタンは極めて強力な温室効果ガスであり、放出後20年間という短期間で見ると、その温暖化能力は二酸化炭素の80~90倍にも達します。ジャクソン教授は、大気中のメタン濃度が測定開始以来急激に上昇しており、そのペースが二酸化炭素をはるかに上回っていることに警鐘を鳴らしています。

ジャクソン教授は、メタンが極めて強力な温暖化能力を持っているにもかかわらず、長年見過ごされてきた理由の一つに、その排出源の多くがエネルギー産業ではなく農業分野である点を挙げています。メタンの排出は食料生産、特に牛肉や乳製品のために飼育される牛と密接に関わっています。温室効果ガスと食料安全保障を巡る議論は複雑であり、これまでメタンへの関心が低かったのはそのためでもあります。しかし、今後10年から20年のスパンで気候変動を遅らせるには、メタンの削減こそが「最も強力かつ効果的な手段」であるという事実、ようやく人々が気づき始めたのです。

メタンの排出源は、大きく自然起源と人為起源に分けられます。自然起源の一つとして火山活動が挙げられますが、現在の火山噴火が過去より多くのメタンを放出しているという証拠はありません。もう一つの自然起源として、北極圏の永久凍土の融解に伴うメタン放出があります。地球温暖化が進めば排出の増加が予想されるものの、現時点では、同地域から制御不能な形で急激に排出が進む「暴走的な排出」の兆候は確認されていません。現在、ジャクソン教授が最も強い懸念を抱いている自然システムは、アマゾンに代表される熱帯の湿地帯です。教授は長年にわたりアマゾンでフィールドワークを続けており、熱帯地域では気温の上昇に伴ってメタン排出がすでに増加しつつあると指摘しています。温暖化によって気温が上がると、メタンを生成する微生物の増殖が加速し、その結果、より多くのメタンが大気中に放出されます。この意味で、熱帯湿地帯における排出は「自然起源」とされるものの、その増加は人為起源の温暖化が引き金となって生じている——教授はそう警告しています。

このような自然起源のメタン排出は、世界全体のメタン排出量のおよそ3分の1を占めています。残りの約3分の2は、人間活動に由来する排出です。人為起源の排出には、交通分野を含む化石燃料の利用に伴う排出、石油・天然ガスの採掘に伴う排出、

家畜（とりわけ牛のげっぷなど）からの排出、湛水した水田で有機物を分解する細菌によって生じる排出、埋立地など廃棄物由来の排出、家庭や建築物へガスを供給するパイプラインからの漏えい、さらにガスコンロや暖房機器、給湯器など家庭用機器からの漏えいが含まれます。

人為起源排出のうち約 3 分の 2 は農業由来で、残り約 3 分の 1 はエネルギー関連の発生源に由来します。しかし現状では、どちらの部門でも排出が増加し続けています。さらにメタンは、地球温暖化を促進するだけでなく、大気汚染とも関係します。特に、家庭内でメタン（いわゆる「天然ガス」）を燃焼させると、窒素酸化物（NOx）や発がん性が指摘されるベンゼンなどの汚染物質が発生し、ぜんそくを含む呼吸器系の疾患リスクを高め得ることから、ジャクソン教授は室内でのメタン燃焼の危険性に注意を促し、対策の必要性を強調しています。



写真 5 コンロから天然ガスを採取する



写真 6 上海の家庭のキッチンで、汚染物質の排出を測定する様子

特にこの 10 年ほど、ジャクソン教授は住宅や建物からのメタンを含む温室効果ガス排出に強い関心を寄せ、家庭用の化石燃料機器がもたらす汚染について、研究チームとともに調査を進めています。住宅や商業用建物からのメタン排出は、それまでほとんど測定されてこなかったため、教授らは各地で現地データを収集し、この「空白」を埋める試みに取り組んできました。

ジャクソン教授は、ガスコンロやプロパンコンロのそばに立つことは、車の排気管（テールパイプ）から放出される汚染物質にさらされるのと同じような状況になり得ると説明します。そのため研究の目的は、メタン漏えいによる気候への影響を定量化することにとどまらず、人の健康への影響を評価することにもあります。そして同グループの研究によれば、ガスコンロだけから 1 年間に漏えいするメタンの量は、およそ 50 万台の自動車が排出するメタン量に匹敵することが示されています。

このように、気候と人間の健康の両面に深刻な影響を及ぼすメタンについて、ジャクソン教授は、メタンの削減こそが地球温暖化を緩和するうえで最も有望な解決策の一つだと述べています。その鍵となるのが、メタンの大気中での寿命が約 10 年と比較的に短いことです。もしメタン排出を大幅に削減できれば、大気中のメタン濃度は比較的に速やかに低下し、今後 10~20 年のうちに、地球の平均気温上昇を最大で 0.5℃抑え、あるいは押し下げられる可能性があるといえます。こうした短い時間軸で温暖化の進行を大きく鈍らせ得る温室効果ガスはメタン以外にほとんどなく、その点が、教授がメタン削減に強い希望を託す理由です。

＜大気修復＞

現在、ジャクソン教授がとりわけ強い関心を寄せて取り組んでいるのが、「大気修復 (atmospheric restoration)」という考え方です。教授はこの概念を、新著『Into the Clear Blue Sky』(Penguin/Simon & Schuster) でも提唱しています。教授が「大気修復」という枠組みを重視するのは、それが人々にとって行動の動機付けになり得ると考えているからです。たとえば「産業革命以前と比べて世界平均気温の上昇を 1.5℃ (あるいは 2℃) に抑える」といった抽象的な目標は、多くの人にとって実感しにくく、理解や共感を得にくい面があります。一方で、「壊れたものを修復し、健全な状態に戻す」という発想は直感的で分かりやすく、受け入れられやすい。だからこそ教授は、この理にかなった考え方を大気そのものに適用すべきだと主張します。気候変動対策を「大気を修復する営み」として捉え直すことで、地球温暖化という課題をより身近で、そして希望を持てるものとして人々に伝えたい——それが教授の狙いです。ジャクソン教授は、「大気修復」において最優先で取り組むべき対象はメタンだと述べています。理由は明快で、メタンの削減は短期間で大きな効果をもたらし得るからです。教授は、そのために必要なアプローチを次の三つに整理しています。

1. 発生源でのメタン排出を削減する。
2. 大気中に放出される前にメタンを分解（破壊）する。
3. すでに大気中に存在するメタンを分解（破壊）する。

ジャクソン教授の研究室では、大気中のメタンを酸化させ、二酸化炭素など別のガスへ変換する新たな触媒の開発に取り組んでいます。ただし、この技術はまだ開発途上にあります。同時に研究チームは、そもそもメタンが大気中に放出されないようにする対策にも力を入れています。具体的には、パイプラインや家庭内設備からのメタン漏えいを測定するとともに、衛星を活用して世界各地の大規模なメタン排出源を特定し、発生源での排出削減を後押しする取り組みを進めています。ジャクソン教授は、すでに大気中に存在するメタンを分解する技術を開発するよりも、発生源で排出を防

ぐ方が、はるかに効率的で費用対効果も高いと強調します。温室効果ガスの排出量を測定し、その削減に取り組む背景には、気候危機の解決に貢献したいという強い思いがあります。そして、クリーンエネルギーへの移行が、現実的かつ直接的な恩恵を私たちにもたらすことを、多くの人に理解してもらうことも、研究を続ける大きな目的の一つだと語っています。またジャクソン教授は、環境科学者としての夢は、メタン排出を十分に減らし、自分が生きている間に大気の修復を実感できるレベルまで進めることだと述べています。

＜グローバル・カーボン・プロジェクト（GCP）＞

グローバル・カーボン・プロジェクト（GCP）は、気候変動および生物多様性に関わる複数の国際機関が、国連および関連機関の支援を得て、2001年に設立した国際的な研究プロジェクトです。設立以来、温室効果ガス排出の削減と人類の環境負荷の軽減に向けた世界的な取り組みに対し、重要な知見とデータを提供してきました。ジャクソン教授は、このプロジェクトの議長を務めています。GCPでは、二酸化炭素、メタン、亜酸化窒素などの温室効果ガスについて、世界規模での測定・追跡と分析を行っています。海洋、森林、湿地といった自然環境からどれほど排出されているのか、また輸送（交通）や電力生産など人間活動に由来する排出がどれほどあるのかを調べ、排出の全体像を把握するとともに、主要な発生源と効果的な削減策の解明を目指しています。

GCPの取り組みは、二酸化炭素以外の温室効果ガスの重要性について、国際社会の理解を広げるうえでも大きな役割を果たしてきました。さらに、GCPが作成・提供するデータや分析結果は、パリ協定、国連気候変動枠組条約（UNFCCC）、IPCC評価報告書など、主要な国際的枠組みや報告書でも広く活用されています。



写真 7 数年前のグローバル・カーボン・プロジェクト（GCP）運営委員会

＜今後の新たな研究＞

この10年ほど、ジャクソン教授の研究の多くは、都市や建築物など人工的に「構築された環境」における温室効果ガス排出の測定と、その削減策に焦点を当ててきました。具体的には、石油・ガスの採掘過程で生じるメタン漏えい、化石燃料の利用に伴うメタン排出、都市環境での排出などに関する研究です。一方で今後は、自然環境における研究をさらに広げていきたいと教授は考えています。これまで継続してきたアマゾンでのメタン排出測定を基盤に、南米の他地域やアフリカなど、より広い地域へ調査を拡張する計画です。また、ヨーロッパおよび北米の原生林（老齢林）を対象に、生物多様性や土壌の多様性に関する新たな研究にも着手し始めています。さらに、土壌中で植物の根と共生する菌根菌（mycorrhizae）に注目し、その働きを調べることで、世界各地の森林回復を従来よりも迅速に進める手がかりが得られる可能性があります。自然環境における生態学研究を、人工的に「構築された環境」の研究と並行して進めていくことが、教授の探究心をいっそうかき立てているようです。

その他、ジャクソン教授が近年取り組み始めたプロジェクトの一つに、将来を見据えた研究があります。それは、クリーンエネルギーとして期待される水素が社会の主要なエネルギー源になったとき、何が起こり得るのかをあらかじめ検討するものです。水素は燃料として燃焼すると基本的に水蒸気しか生成しないため、直接的にはクリーンなエネルギー源と見なされています。一方で教授は、ポスドク研究者のズータオ・オウヤン氏とともに、グローバル・カーボン・プロジェクト（GCP）として初となる「世界水素収支（Global Hydrogen Budget）」をまとめ、2025年12月に公表しました。

水素そのものは温室効果ガスではありません。しかし水素には、大気中でメタンなどの温室効果ガスを除去する働きを担う物質（いわば大気を浄化する「洗剤」のような成分）を減らしてしまう性質があります。そのため、もし水素が大量に大気中へ漏えいすれば、メタンがより長く大気中に残り、結果として温暖化を間接的に強めてしまう可能性があります。だからこそ教授は、世界が本格的に「水素経済」へ移行する前の段階から、水素利用に伴う環境影響を理解し、将来のクリーンエネルギーへの転換が本当に地球にとって利益となるよう備える必要があると考えているのです。

＜環境科学者としての信条＞

ジャクソン教授は、温室効果ガス排出の削減には大きな投資が必要である一方、人類が地球から引き出すエネルギーや資源、土地などの量は増え続け、同時に汚染も拡大している点こそが、気候変動対策の難しさを生んでいると指摘します。教授によれば、過剰な消費は、気候変動、生物多様性の損失、プラスチック汚染をはじめとする

多くの環境危機の根本にある問題です。そして、その過剰消費と資源利用の「最大のコスト」を負わされているのは、貧しい国々の人々であるといいます。

このため教授は、実効性のある気候変動対策を進めるには、企業・産業界・政府の協力が不可欠であり、企業や国家が主体的に関与しない限り、気候危機は解決できないと強調します。同時に、こうした不均衡を是正するためには、資源使用を抑え、世界全体でより公平に分かち合い、過剰な搾取を避けることが必要だとも述べています。

また、深刻な課題が山積する世界において、科学の探究で最も重要なのは「欲しい答えを得るために研究する」のではなく、答えが実際にどうであるかを見いだすために研究することであり、その過程をできる限りオープンで再現可能な形で行うことだと、教授は語ります。さらに、政府や研究機関、企業がより良い意思決定を行えるよう、質の高い情報を提供することは科学者の責務であり、それこそが科学者としての信頼性の基盤であり、自らの信条でもあると述べています。



写真 8 油田でガス漏えいを撮影するジャクソン教授

(写真提供：フィル・ローバージュ／スタンフォード大学)

<家族のこと、趣味のこと>

ジャクソン教授一家は妻と3人の息子からなる5人家族です。現在は陶芸家として活動している妻のサリーさんとは、ライス大学時代に共通の友人の紹介で知り合い、教授がダウ・ケミカル・カンパニーに就職してカリフォルニアで働き始めてから数年後に結婚しました。サリーさんは、ジャクソン教授のことを、ひたむきで自立心と探究心にあふれ、研究の成果や専門知識を独り占めせず、常に周囲の人々と分かち合おうとする人物だと語っています。

プライベートでは、幼少期と変わらずアウトドアで過ごす時間を大切にしています。大学院時代に鳥類学を専攻していたサリーさんと一緒に楽しむバードウォッチングやハイキングは、特にお気に入りの活動です。また、友人たちと釣りに出かけることも多く、自然の中で過ごす時間を心から楽しんでいるといいます。自宅の庭にはさまざまな果樹を植え、花壇やキッチンガーデンではトマトやハーブを育てるなど、日々の暮らしの中で自然と向き合う時間を楽しんでいます。

さらにジャクソン教授は、科学者としての活動にとどまらず、子ども向けの詩集を出版するほか、趣味として続けてきた写真が、米国の著名な新聞や雑誌に掲載されるなど、作家・写真家としても幅広く活躍しています。



写真 9 スタンフォード大学で講演するジャクソン教授



写真 10 Djerassi Resident Artists Program
(芸術家滞在型制作支援プログラム)にて

＜若者たちへのメッセージ＞

最後に、ジャクソン教授から若者たちへのメッセージです。

「私は、できる限り希望を持ち、楽観的であろうと努めています。今の若者たちは、気候変動をはじめとするさまざまな理由から、世界を見渡して自分たちの将来に不安を感じています。だからこそ私は、状況は良くなり得るのだということを伝えたいのです。実際に、すでに多くのことが改善されてきました。世界全体で乳幼児死亡率は低下しています。多くの豊かな国々では、空気や水の質が向上しました。不公正や格差は依然として残っているものの、世界的な貧困も過去と比べれば減少しています。オゾン層保護のために制定されたモントリオール議定書は、何十億件もの皮膚がんや、何百万件もの白内障の発生を防いできました。また、大気浄化法によって空気はきれいになり、大気汚染の減少により、毎年何十万人もの命が救われています。そうです。今日、世界には、以前よりも確実に良くなっていることがたくさんあります。私はこうした成功の物語が大好きですし、人々に、環境問題も私たちが本気で向き合えば解決できるのだということを知ってほしいと思っています。ただし、気候変動に関して言えば、私たちは今、間違った方向へ進んでいます。だからこそ、このメッセージを今伝えることが、極めて重要なのです。」

私が気候変動について最も強く伝えたいのは、これは将来世代のためだけの問題ではなく、今この瞬間の問題だということです。つまり、私たちの現在の健康に直結しています。クリーンエネルギーは人命を救います。私は、気候変動対策とクリーンエネルギーによる解決策の力を信じています。なぜならそれらは、今日の私たちにも、そして明日の私たちにも力を与えてくれるからです。